

みやこ
京まなびミーティング②9 特別動画
「聖徳太子と山背（やましる）」



京都市社会教育委員が学校や地域に出向き、特別授業などを行う「京（みやこ）まなびミーティング」。第29回となる今回は、「アスニー ゴールデン・エイジ・アカデミー」でもご講演いただいている、本郷 真紹先生の講演を動画として配信します。

「聖徳太子と山背（やましる）」というテーマでWEB用にご講演いただいた、ここでしか視聴できない動画です！

講師 京都市社会教育委員会 副議長 本郷 真紹 先生

学校法人立命館理事補佐、立命館大学文学部教授

本郷先生からのコメント



令和4年（2022）は、聖徳太子の没後1400年にあたります。これを記念して、奈良県の各自治体等では、さまざまなイベントが企画されています。日本における仏教の礎を築き、後世「和国の教主」と称された聖徳太子ですが、古代の山背にも、聖徳太子とゆかりの深い寺院が所在し、今日まで法灯を伝えています。

今回は、京都市に所在する六角堂頂法寺と広隆寺を取り上げ、その来歴を探ってみたいと思います。あわせて、聖徳太子の配下にあつたと考えられる秦河勝に代表される秦氏との関係から、深草と伏見稻荷大社にも触れてみたいと思います。



皆さんこんにちは。立命館大学文学部の本郷真紹と申します。

本日は「聖徳太子と山背一ゆかりの寺院」ということでお話をさせていただきたいと思います。

聖徳太子と申しますと、日本史上におきまして最も有名な人物の一人、とくに古代史においては、大きな政治的あるいは文化的業績を残された方として高く評価されてきた人物でございます。

用明天皇の皇子として生まれられたこの聖徳太子が、国政の改革のみならず、対外関係やあるいは仏教の興隆というような様々な方面で大きな足跡を残されたわけですが、この山背・京都の地におきまして、聖徳太子とゆかりが深いと伝えられる寺院が今日法灯を伝えております。

本日はその中で、六角堂頂法寺、そして太秦の広隆寺という二つの寺院を取り上げ、改めて、聖徳太子とのご縁という点について見ていきたいと思います。

再来年の2022年は聖徳太子が亡くなられてからちょうど1400年という年を迎えます。

これにちなんで、奈良県では聖徳太子のゆかりの遺跡等で様々なイベントが企画されておりますけれども、この京都にも聖徳太子のゆかりの施設が伝わっている、ということで改めてこのことを認識していただければありがたいと存じます。よろしくお願い申し上げます。

■聖徳太子の生涯 その1

聖徳太子の生涯 その1

- | | |
|-----------|-----------------------|
| 敏達3 (574) | 聖徳太子、生誕と伝える。 |
| 用明2 (587) | 蘇我馬子による物部守屋討滅に従軍 |
| 推古元 (593) | 推古天皇の皇太子となり、摂政を命じられる。 |
| | 四天王寺創建と伝える。 |
| 同 2 (594) | 天皇より仏教興隆を命じられる。 |
| 同 8 (600) | 遣隋使派遣『隋書』倭国伝) |
| 同 9 (601) | 斑鳩宮建立 |

まず始めに聖徳太子の生涯につきまして、その概略

を見ておきたいと思います。

聖徳太子がお生まれになったのは敏達 3 年西暦 574 年、お父様が用明天皇、そしてお母様が穴穂部間人皇后（あなほべのはしひとのこうごう）、いずれも欽明天皇のお子様でございます。そのお二方の間に聖徳太子がお生まれになった。ただ「聖徳太子」という名称でここでは統一させていただきますけれども、実はこの聖徳太子というお名前は 8 世紀奈良時代になってから使われるようになったお名前でございます、「日本書紀」は厩戸皇子（うまやどのみこ）という形で出てまいります。

その聖徳太子が生まれられて、ちょうど 14 歳の時、お父さんの用明天皇が即位されて、わずか 2 年でお亡くなりになりますと、その後継をめぐる問題と絡めて、当時朝廷の中で有力な立場にあった、大臣（おおおみ）の蘇我馬子、大連（おおむらじ）の物部守屋（もののべのもりや）が対立を深め、ついに武力衝突に発展いたします。この時、聖徳太子は父方母方ともにおばあさまが蘇我氏の女性でございましたので、そういった関係から他の皇族方とともに、蘇我のほうの軍勢に加わりました。物部守屋の討滅に向かわれたということになります。この後崇峻天皇の時代を経て、推古天皇という日本史上初の女性天皇といわれている方が即位されますと、その元年西暦 593 年に、推古天皇から聖徳太子は「皇太子」そして「摂政」という地位につけられることになります。

大臣の蘇我馬子が朝廷で大きな力をふるっておいりましたので、聖徳太子はこの蘇我馬子とともに国政に携わられるようになった、ということでございます。この年にかつて聖徳太子が物部討滅軍に加わられた時に自ら戦勝祈願して発願したとされます寺院の建立、これが始められまして、後の四天王寺がその寺院だというふうに伝えられております。

翌年の推古 2 年西暦 594 年には、推古天皇から聖徳太子（厩戸皇子）と蘇我馬子が仏教の興隆を命じられることになります。仏教は聖徳太子のおじいさまに当たります欽明天皇の時代、西暦 538 年とも 552 年とも言われますが、百済の聖明王から仏教の文物が日本の朝廷に伝えられた。これをもって仏教公伝とされ

るわけですが、仏教を受け入れるか否かについては、朝廷の中でも意見の対立がございまして、なかなか朝廷一丸となって仏教を受け入れるということができない状況にありました。その受容に反対していた最先鋒が物部守屋という人物で、この物部守屋が蘇我馬子によって攻め滅ぼされたということで、朝議が仏教の受容と興隆に一致しまして、この段階になって聖徳太子や馬子によって仏教の興隆が進められるようになった、ということになります。

推古天皇の 8 年西暦 600 年には遣隋使が派遣されたと、中国の史料でございます『隋書』倭国伝に出てまいります。なぜか日本側の史料であります「日本書紀」などにはこの記録は残されておりません。そして翌年推古 9 年西暦 601 年に、聖徳太子は自らの一家の本拠となります斑鳩の地に宮を造営される、という運びとなります。

■聖徳太子の生涯 その2

聖徳太子の生涯 その2

- | | |
|-----------|--------------------------------|
| 推古11(603) | 秦河勝に仏像を授ける。河勝、蜂岡寺建立
冠位十二階制定 |
| 同 12(604) | 憲法十七条起草 |
| 同 15(607) | 壬生部を定める。
遣隋使小野妹子発遣 |
| 同 25(617) | 勝鬘經講説の功により、湯沐戸を授かる。 |
| 同 29(621) | 生母・穴穂部間人皇后薨去 |
| 同 30(622) | 太子妃・膳大刀自薨去 聖徳太子薨去 |

続いて推古 11 年西暦 603 年、秦河勝（はたのかわかつ）に対して聖徳太子が仏像を授けられます。これによって秦河勝が広隆寺の前身となる蜂岡寺を建立した、と「日本書紀」には記されております。

同じ推古 11 年には先に少し触れました、冠位十二階という、後の位階制の起源となる制度が発足します。そして翌推古 12 年西暦 604 年、憲法十七条が太子の手によって起草された、というふうにされております。

推古 15 年西暦 607 年には、壬生部（みぶべ）を定めた、という記事が日本書紀に出てまいります。壬生部というのは乳部（ちちのべ）、つまり牛乳の乳という字ですね。これと「部」という字を書きまして「乳部」と表記することもございますが、その意味すると

ころは、特定の皇族方の経済的基盤として農民の集団を指定したと、つまりその農民の集団が差し出すべき租税が個人的な収益として、皇族方の下に納められる。これによって皇族方がその宮を維持される、こういうシステムが取られていたわけで、その壬生部が定められたということになります。

聖徳太子もまた、この「壬生部」を経済基盤として様々な活動を展開された、ということになるかと思っています。

推古 15 年には遣隋使の小野妹子が発遣されました。あの有名な「日出処の天子、書を日没する処の天子にいたす、つつがなきや」という国書を携えて隋の皇帝煬帝の元へ赴いた、ということになります。

飛びまして推古天皇 25 年（617 年）、勝鬘經（しょうまんぎょう）という仏教のお経を講説した、その功績に対しまして、推古天皇から湯沐戸（とうもくのか）を授かったという記事が日本書紀に載っております。

湯沐戸というのは、これもまた特定の皇族方一家を養う経済基盤として設定された農民の集団ということで、この集団から本来は朝廷に対して納められるべき租税にあたるものが皇族の宮に入り、それで宮が運営された、こういうシステムが設けられていたことになります。

ちなみにこの時聖徳太子が講説された勝鬘經、この他にも聖徳太子は維摩經（ゆいまきょう）あるいは法華經というような經典を推古天皇に講説、すなわち読み説かれたということが伝えられておりまして、この聖徳太子が 3 つの經典の注釈書を表されたのが、今日に伝わる「三經義疏（さんぎょうのぎしよ）」であるというふうにされております。

推古天皇の 29 年西暦 621 年、聖徳太子のお母様、穴穂部間人皇后がお亡くなりになります。そうするとあたかも後を追うように、翌年推古天皇 30 年（622 年）に聖徳太子がお亡くなりなるわけですが、その聖徳太子が亡くなる直前に、太子の妃でございました膳大刀自（かしわでのおおとじ）あるいは（かしわでのおおいらつめ）という方が亡くなりました。そしてこの穴穂部間人皇后と聖徳太子と膳大刀自というこのお三方が、現在の大阪府南河内郡太子町の磯長御廟（しながのごびょう）という所に一緒に葬られ、

現在は叡福寺というこのお墓をお守りするお寺がそこに立っておりますけれども、3 人の一体の御廟が設けられたということになります。

■六角堂頂法寺の創建譚①



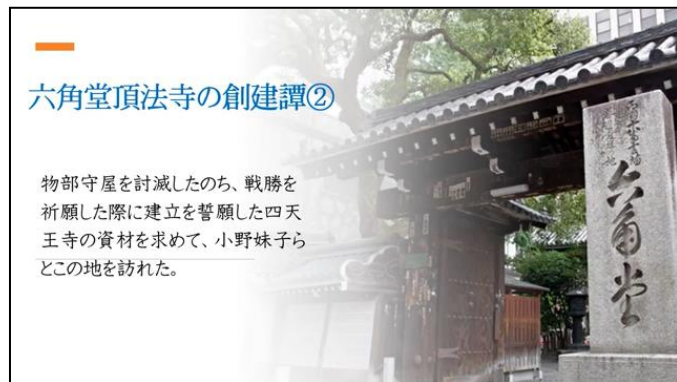
六角堂頂法寺の創建譚①

聖徳太子は、中国・南岳衡山ゆかりの仏像で、淡路の岩屋に流れ着いた如意輪観音像を、自身の守り本尊としていた。

京都にございます、聖徳太子ゆかりの寺院として、まず六角堂頂法寺の創建についてみていきたいと思っております。

六角堂頂法寺のご本尊・如意輪観音。この如意輪観音はかつて聖徳太子が守り本尊とされていた仏像で、この仏像は遠く中国の南岳衡山（なんがくこうざん）という所からおくられてきたもの、と言われております。南岳衡山の仏像がいったん海に入れられ、その流れ着いたのが、淡路島の岩屋という所で、これを手に入れました天皇から聖徳太子が譲り受けて、守り本尊とした、と縁起には説かれております。

■六角堂頂法寺の創建譚②



六角堂頂法寺の創建譚②

物部守屋を討滅したのち、戦勝を祈願した際に建立を誓願した四天王寺の資材を求めて、小野妹子らとこの地を訪れた。

聖徳太子はその父親であります用明天皇ならびに母親であります穴穂部間人皇后のお二人が、蘇我堅塩媛（そがのきたしひめ）あるいは蘇我小姉君（そがのおあねぎみ）といった蘇我稲目の娘の産んだお子でございましたので、蘇我氏と非常にゆかりの深い環境で育てられたと考えられます。その関係もあって、当時朝廷で大きな勢力を持っておりました蘇我氏と対抗馬でございます物部氏がいよいよ対立を深めて武力衝突を起こすに至った 587 年の戦乱の際には、若き聖

徳太子も蘇我の軍勢に加わって物部の討滅に赴いたというふうに伝えられています。

この時に聖徳太子は自ら四天王の像を刻んで戦勝を祈願するとともに、その暁には、四天王のための寺を建立すると請願されます。こうして建立に至ったのが有名な摂津の四天王寺でございますけれども、その四天王寺の造営のための資材を得るために、聖徳太子は小野妹子を引き連れて、この山背の地にやって来たというふうに言われています。

■六角堂頂法寺の創建譚③

六角堂頂法寺の創建譚③

池の辺のタラノキに守り本尊を置き、太子が沐浴すると、この地にとどまるといふ観音のお告げを聞いた。



山背の葛野郡という所に至られた聖徳太子が池のほとりで、タラノキに自らの守り本尊を置かれ、その池で沐浴をしようとなされました。その時に観音が聖徳太子に「自分がこの地にとどまり、様々な功德を施したい」とご意向を伝えられたというふうに言われます。このことにちなんで、現在の六角堂頂法寺の境内には池が設けられ、池のほとりに聖徳太子をまつたお堂がございます。

■六角堂頂法寺の創建譚④



六角堂頂法寺の創建譚④

この地に堂舎を建てようと奇材を求めると、一人の老人(唐崎明神)が現れ、霊木の禿杉のありかを教えた。

聖徳太子は如意輪観音のお告げによりまして、この地にその観音像をまつるお堂を建てようと思いたれます。そのお堂の資材となる木を求めようとした時、一人の老人が現れ、聖徳太子をいざなって霊木を教える、という運びになっております。霊木と申しますの

は、紫雲が立ち込めた非常に貴い木、禿杉(かむろすぎ)でございます。この木材を使ってこの後、六角堂が建立されることになるわけです。

後にこの老人というのは、実は、六角堂からいたしますと東方の神様で、琵琶湖のほとり、近江の国の唐崎という所に鎮座します「唐崎明神」であるというふうに受け止められるようになります。

唐崎神社というのは、現在も日吉大社の摂社としてまつられておりますけれども、今申しましたように日吉大社、さらには比叡山延暦寺と大変ゆかりの深い神社でございます。

六角堂頂法寺がこの後一時天台宗の寺院として存在することになりましたので、そのゆかりもあって、おそらく聖徳太子に出会われたこの老人が、天台宗ともゆかりの深い唐崎明神というふうにされるように至ったのであらうと考えられます。

現在も六角堂頂法寺の境内に唐崎明神がおまつりされてあります。

■六角堂頂法寺の創建譚⑤

六角堂頂法寺の創建譚⑤

タラノキの六つの根にその霊木で柱を立て、六角堂と名付け、寺号を頂法寺とした。



如意輪観音がお留まりになった池のほとりのタラノキ。このタラノキに六つの根が出ておりまして、その根の場所に、今申し上げました老人、唐崎明神によって教えられた禿杉の木材で柱を立て、その関係で、この堂舎自身が六角形の建物となり、六角堂と名付けられたと。

そしてまた日本でいみじくも最初の寺院となった、ということで仏法の頂点、始めに位置するということで「頂法寺」と寺号がつけられたと伝えられます。現在も六角堂の本堂はご承知のとおり六角形をしておりまして、上から見るときれいにその形を呈しているということになります。

■六角堂頂法寺の創建譚⑥

六角堂頂法寺の創建譚⑥

池に因んで池坊と呼び、小野妹子を寺主とした。



聖徳太子は新たに造営されました六角堂頂法寺の寺主、その責任者に小野妹子を任命されます。妹子は遣隋使として有名な人物ですが、現在の滋賀県近江の国の「小野」という所を本拠とする豪族で、山背にもまた小野の一族は基盤を持っていました。

京都市左京区の上高野に「崇道神社（すどうじんじや）」という神社がちょうど八瀬、大原に向かう京都の「口」のところにあります。そこから「小野毛人（おののえみし）の墓誌」というのが出土しており、小野氏は上高野にも基盤があったと確認されるわけです。

同時に山科にも小野というところがございます、随心院というゆかりのお寺があります。ここは小野小町の伝承でも有名な寺院でございます。こういうふうに山背にも拠点をもっていた、そのゆかりもあって、小野妹子が六角堂頂法寺の初代の寺主とされたというふうに伝えられます。

その関係で流れをくみます池坊、聖徳太子が沐浴された池にちなんで池坊と名付けられた堂舎がずっとこの六角堂頂法寺の護持を司ってきたわけであります。

今日ではむしろ華道の家元として知られます池坊、そのようなご縁から小野妹子を聖徳太子と共に大事にされて、小野妹子の墓にこのように参詣される。神職のあとについてお参りに行っておられるのが、次期家元の池坊専好さん、池坊の総本部長でございます池坊雅史さんが写真に写っております。

この小野妹子の墓というのが、大阪府の南河内郡太子町にあります聖徳太子の磯長御廟のすぐ近くに所在いたします。ただ、小野妹子の本拠であります滋賀県の小野にも妹子の墓と伝えられる古墳がございます、ここにも小野妹子神社という神社までまつられておりますけれども。この古墳、唐臼山古墳（からう

すやまこふん）と呼ばれております。

妹子の墓というのが二か所にあるわけで、どのような経緯でそうなったのかという詳しいことはよくわかっておりません。いずれも小野妹子にゆかりの深い地、あるいはゆかりの深い聖徳太子の御陵のそば、ということで、あえてそこに墓が設定されたというふうに考えられるわけであります。

■広隆寺の創建譚①

広隆寺の創建譚①

①『日本書紀』推古11年(603)11月

聖徳太子が諸大夫に、「私は尊い仏像を持っているが、誰かこの仏像を引き取って拝むものはいないか」と問うところ、秦河勝が「私が拝みます」と申し出、拝受して蜂岡寺を建立した。

②『上宮聖徳太子伝補闕記』

推古24年(616)天皇の病により太子と諸豪族が寺を建立した。これより以前に、太子は山背の楓村を訪れ、蜂岳の南に宮を建てた。この宮を預かった秦河勝が、新羅より伝来した仏像を賜り、宮を寺として水田・山野の地を施入した。

次にもう一つ、聖徳太子に縁の深い山背の寺院として、有名な太秦の広隆寺を取り上げてみたいと思います。

広隆寺の創建に関わる話として、まず最初に、「日本書紀」には推古11年(603年)11月に聖徳太子が諸々の大夫(まへつぎみ)に「私は尊い仏像を持っているが、だれかこの仏像を引き取って拝むものはいないか」とお問いになったところ、秦河勝が「私が拝みます」と申し出まして、この仏像を拝受して蜂岡寺を建立した、というふうに記されております。

秦河勝というのは秦氏、すなわち山背国の葛野郡あたりを本格的に開発して、その生産力を高めた渡来系氏族の秦氏の一員として、この時代に登場した人物であります。

一方で「上宮聖徳太子伝補闕記(じょうぐうしょうとくたいしでんほけつき)」という平安の前期に成立しました聖徳太子の伝記によりますと、推古天皇の24年(616年)に天皇の病によって、聖徳太子や諸々の豪族が寺を建立しました。実はそれ以前に、聖徳太子は山背の楓村を訪れ、蜂岳の南に宮を建てられます。

後に、この宮を預かった秦河勝が、新羅より伝来した仏像を賜って、この宮を寺として水田や山野の地を施入した、というふうに出てまいります。時期的にも経緯にも少し「日本書紀」とは違った伝承が聖徳太子

に関わる伝説として残されていた事になります。

■広隆寺の創建譚②

広隆寺の創建譚②

③『聖徳太子伝暦』推古12年(604)8月条

太子が楓林で秦河勝とその親族にもてなされた夢を見た。河勝に誘われてその地へ赴き、夢の如く大いに接待を受けた。太子はこの地がやがて都となることを見抜き、宮を建ててしばしば訪れたが、のちにこの宮を寺として河勝に賜った。

④『日本書紀』推古31年(623)7月条

新羅が使者を遣わして、仏像・金塔・舍利を貢じてきた。その仏像を葛野の秦寺に安置し、舍利等は四天王寺に納めた。

今一つ聖徳太子の伝記で、先ほどご確認いただきました「聖徳太子伝補闕記」とはちょっと時代が下がって、平安時代後期になるわけですが、このころ成立したと考えられる「聖徳太子伝暦（しょうとくたいしでんりゃく）」という史料によりますと、推古12年（604年）8月に、太子が楓林で秦河勝とその親族にもてなされた夢をご覧になりました。そのことをお話しなさいますと、側近でございました秦河勝が太子をいざなって自らの本拠であるその地へ赴き、夢と同じように一族をあげて大いに太子をもてなされました。

聖徳太子は先見の明のある人物でございますので、この地にやがて都が設けられることがお分かりになって、そのことを予見されて、そこに宮を建てられて、気に入られた宮でございましたので、しばしば訪れましたけれども、のちにこの宮を寺として秦河勝にお与えになりました。これが、広隆寺の由来である、というふうに説かれてございます。

一方で「日本書紀」にはもう一つ、推古天皇の31年（623年）ということですから、聖徳太子が亡くなられてから後の話でございますけれども、新羅が使者を遣わして、仏像や金塔や舍利を貢じてきた、と。その仏像を葛野の秦寺に安置して、舍利等は四天王寺に納めたと、こういった記事が出てまいります。

新羅から送られてきた仏像、葛野の秦寺というのが広隆寺の事と考えられますので、そこに安置されたということで、この後ご確認いただきます広隆寺に今日伝わっております弥勒菩薩像との関係がここで想起されることとなります。

■広隆寺の創建譚③

広隆寺の創建譚③

⑤『広隆寺縁起』

推古11年(603)秦河勝が聖徳太子より仏像を拝受し、蜂岡寺を造立した。壬午の年(推古30年、622)崩御した聖徳太子のために、河勝は広隆寺を建立した。但し、この広隆寺は、もと九条河原里・荒見社里に所在し、のち五条荒蒔里に移った。

今度は、広隆寺に伝わる「広隆寺縁起」の内容を確認しておきたいと思います。「広隆寺縁起」は平安の前期に成立した同寺の縁起でございますけれども、これによりますと、推古天皇11年（603年）に秦河勝が聖徳太子より仏像をもらい受け、蜂岡寺を造立いたしました。これは「日本書紀」の内容に一致しております。

その後、壬午の年（推古30年、西暦622年）聖徳太子が亡くなりますと、そのために秦河勝は広隆寺を建立した、とされています。蜂岡寺とはまた別に、あるいは場合によってはこれを移転吸収する形で、広隆寺という寺院が建立されたとされているわけであります。

ただし、この広隆寺は、もともとは九条河原里（くじょうのかわらのさと）・荒見社里（あらみのやしらのさと）に所在し、のち五条荒蒔里（ごじょうのあらまきのさと）に移った、と記されております。元々九条という、現在の広隆寺の地よりもさらに南の方にございました寺院が、なにがしかの理由で、おそらくは火事に遭ったとか、そういう理由であったと思いますが、現在の地に移ったというふうになるわけでございます。

■北野廃寺跡遺跡

北野廃寺跡遺跡



秦河勝が建立したとされます蜂岡寺、これが広隆寺の前身の寺院と考えられておりますけれども、この蜂岡寺がどこに所在したのか、ということにつきまして

は、史料等からいろんな可能性が提起されていますけれども、未だ確たる場所が定まっているわけではありません。

そのひとつの有力な候補として挙げられるのが、この北野廃寺という、現在の北野白梅町、嵐電のターミナルがございませけれども、そのあたり一帯から検出される寺院跡の遺跡です。

この寺院跡はですね、7世紀の初期の頃のものだということが、確認されているわけですが、その北野廃寺が候補のひとつとして、有力視されております。ただ、この地から出土した土器にはですね、「野寺（やじ、のでら）」、野の寺と書くのですが、野寺と書いた文字が出てまいりまして、これが果たして蜂岡寺と同じようなものなのかどうか、ということについては、若干見解が分かれるところもございます。

いずれにしましても、この山背でかなり早い段階に成立した飛鳥寺院として、北野廃寺は注目されているわけでございます。これに該当する同時期の史料に残る寺院ということになりますと、やはり蜂岡寺との関係、もちろんこの辺り一帯に勢力を張っていた秦氏との関係からしましても、これが広隆寺の前身寺院である可能性は否定できない、ということで、今後のさらなる発掘調査結果に期待されるところが大きいわけでございます。

■広隆寺 弥勒菩薩半跏像



太秦の広隆寺には、二体の国宝弥勒菩薩像が伝わっております。このうち向かって左の、俗に「宝冠弥勒（ほうかんみろく）」と呼ばれます弥勒菩薩像は、アカマツで作られております。アカマツを用材とするというのは、当時の彫刻としては非常に珍しくて、日本の場合はほとんど楠で作られるものが多いのですが、お隣の朝鮮半島ではこのアカマツというのが仏像の素

材として用いられた、と。

その関係から、この仏像は朝鮮半島の新羅から伝わったものではないかと言われておりまして、実際に現在ソウルの国立中央博物館に所蔵されております「金銅弥勒菩薩像」が、この弥勒菩薩像と極めてよく似た形体をとっております。そういった関係から、渡来した、朝鮮半島からもたらされた仏像ではないかと。秦河勝がもらい受けてまつた仏像ではないかと言われていたものでありますけれども、最近、その背板の部分に楠が用いられているということがわかりまして、果たしてこれが従来のような解釈でいいのかどうか、ということについては、また異なった見解も出されるに至っております。

一方、右側の宝髻弥勒菩薩像（ほうけいみろくぼさつそう）、俗に「泣き弥勒」と呼ばれておりますこの仏像は少し時代が下りまして、7世紀の後半ごろの作ではないかと考えられております。こちらの方は楠で作られた仏像で、おそらく日本で作られたものであろうと。

左側の宝冠弥勒の方が元々広隆寺の金堂に安置されており、この宝髻弥勒の方は薬師堂に安置されていた、そういうふうに伝わっております。

■広隆寺 上宮王院太子殿 聖徳太子像



広隆寺の正面、現在の本堂にあたりますところに、「上宮王院太子殿（じょうぐうおういんたいいしでん）」と言われる建物がございませ。こちらの建物の中に、聖徳太子像が安置されております。

この聖徳太子像は12世紀の前半に作られたもので、聖徳太子の33歳の時のお姿を現したものとされています。この33歳の時に、ちょうど秦河勝が聖徳太子より仏像をいただいたと、その頃のお姿ということになります。大事なことは、この聖徳太子像が身に

まとわれている衣、そのお衣は歴代天皇より下賜された天皇のお衣、これを代々身にまとってこられた、ということで、現在もなおそういった習慣で、代替わりごとにそのお衣を変えるということが行われているということでございます。

■広隆寺 桂宮院本堂 聖徳太子半跏像



広隆寺には鎌倉時代に建てられました桂宮院本堂（けいきゅういんほんどう）という国宝の建物が所在いたします。この建物、八角形の建物で、その中に聖徳太子の半跏像が安置されております。

鎌倉時代に広隆寺の別院として建てられたと考えられているもので、先ほどご覧いただきました本堂の聖徳太子立像がちょうど33歳のお姿の聖徳太子像であるのに対し、こちらの聖徳太子半跏像の方は16歳の頃のお姿とされております。

■上宮王家滅亡事件(643)

上宮王家滅亡事件(643)

蘇我入鹿は、斑鳩宮にいた山背大兄王ら上宮王家に軍勢を差し向け、討滅を図った。

山背大兄王は、一旦は難を逃れ、生駒山の山中に逃げ込んだ。

側近の三輪文屋君が、「深草の屯倉に移り、さらに東国に赴いて乳部の兵を徴発し、戻って戦えば、必ず勝利できます」と山背大兄王に進言した。

王は流血を望まないと拒否し、斑鳩寺に入って、その親族と共に自尽した。

これまで六角堂頂法寺、そして太秦の広隆寺という山背にございます聖徳太子ゆかりの寺院についてみてまいりました。両寺ともに聖徳太子がこの地を訪れ、お寺の建立につながったといった伝承を持っているわけでございますけれども、残念ながら、聖徳太子のことに触れた「日本書紀」の記事には、聖徳太子が直接山背に赴いたといったことを書きとどめたものは見当たりません。

しかしながら、秦河勝との関係などを通じて聖徳太子が山背と深い関係を持っていた、その可能性は極めて高いもので、そのことをうかがわせる史料が、実は聖徳太子亡き後に勃発した上宮王家滅亡事件に関する「日本書紀」の記事に見当たります。

上宮王家滅亡事件というのは、西暦643年皇極天皇の時代におこりました事件で、時の権力者蘇我入鹿、これは蘇我馬子の孫にあたる人物で、この人物が斑鳩宮に軍勢を差し向けて、聖徳太子の子どもでもある山背大兄王（やましろのおおえのおう）とその一族をすべて死にいたらしめたという悲惨な事件でございます。その記事は次のようにございます。

蘇我入鹿は斑鳩宮にいた山背大兄王ら上宮王家に軍勢を差し向け、討滅を図った。

山背大兄王は一旦は難を逃れ、生駒山の山中に逃げ込んだ。

側近の三輪文屋君（みわのふみやのきみ）が「深草の屯倉（みやけ）に移り、さらに東国に赴いて乳部（みぶべ）の兵を徴発し、戻って戦えば必ず勝利できます」と山背大兄王に進言した。

ところが、王は流血を望まないと拒否し、斑鳩寺に入って、その親族と共に自尽した。

と、こういう経緯が伝えられております。ここで触られます、ラインマーカーでしりました「深草の屯倉」というところですね。この深草の屯倉にいったん逃れてから、さらに一番の勢力の基盤でありました東国の乳部、先ほど少しご紹介しましたけれども、皇族の方の生活基盤として設けられた部民（べみん）という人々の集団、これが直轄する人々ということになるわけですが、その乳部の兵を徴発して戦えば、十分に蘇我入鹿とも渡り合えるんだということを進言されたということになっております。

その時、一旦移ろうとした深草の屯倉というのが、まさに秦氏の本拠地に置かれていた朝廷の直轄地であり、そこに逃れるということが重要な意味を持っていた。ということは、逆にそこが山背大兄王とその一族にとってはむしろ優位に事態を運べるような、その可能性をもった土地であったということで、当然そこ

に彼らを救う、支援する勢力がいた、ということが想定されるわけであります。

■深草と秦氏



深草の屯倉が設けられましたこの深草という地は、かつて山背国の、とりわけ京都盆地の開拓に大きな業績を残した秦氏の本拠とした土地として知られております。

史料上では、聖徳太子の祖父にあたります欽明天皇の6世紀前半の段階で、秦大津父（はたのおおつち）という人物が山背国紀伊郡深草里を本拠として、この欽明天皇に近侍し、大蔵という国家財政の管理にあたったと記されております。

同時に、秦大津父は秦人（はたひと）あるいは「あやひと」といった渡来人を組織しまして、おそらくはその高度な知識や技術というものを利用する形で、朝廷に貢献していたということがうかがわれるわけでございます。

この秦大津父のみならず、秦氏は一般にその優れた技術でもって山背あるいはお隣の近江といった地域で様々な社会事業を展開していた、その伝承と痕跡が残されております。一番有名なところでは、秦氏の氏神の系譜をひきます松尾大社のございます、桂川の流域のところで、秦氏の手によって桂川に堤防、川の中の堤が築かれ、これが大堰と呼ばれているわけですが、そこから用水路を開掘し水を土地に注ぎ込ませて農耕に利用するという、そういう土木工事を行ったということが史料からも確認されてまいります。

大堰川という桂川の別名自体が、この秦氏の築いた大堰という堤防にちなんだものというふうに言われておりますけれども、いずれにしても、この土地を様々な形で開拓して生産力を向上させると同時に、合わせて琵琶湖から淀川水系にいたる幅広い範囲での、水運というものを利用した形で秦氏はおそらく朝

鮮半島などとの交易、通商等にも関わっていたということが同時に想定されるわけでございます。

■伏見稲荷大社—秦氏の祖霊—



京都で秦氏関係の施設と申しますと、もともと氏寺として発展した太秦の広隆寺、そして氏神をまつた松尾大社というのが知られております。この広隆寺や松尾大社のあるこの地域こそが、秦氏が開発しその拠点とした地域ということになるのですけれども、それ以前は実は深草に秦氏は拠点をもっていた。この時に秦氏がまつた社が、現在もなお多くの参詣者でにぎわっております伏見稲荷大社ということになるわけでございます。

伏見稲荷の「稲荷」というのは、今日でこそ「おinariさん」という神の使いとしてのきつねを象徴する、そういう名称として認識されている向きが強いのですが、本来その言葉の由来は、「稲なり」稲がなるという、すなわち生産を司る、多くの生産をもたらす、そういった効果のある神としてあがめられた、という、これこそがまさに秦の特徴と非常に合致した、そういう性格を窺うことができるわけであります。

この伏見稲荷大社には秦氏の祖霊がまつられたと、そういったことで深草もまた、この松尾大社のございます右京と同様に、秦氏の痕跡が色濃くここに見受けられるわけであります。ここにいったん身を置くことが進言されたということは、やはり、聖徳太子、上宮王家が山背の秦氏の本拠と密接な関係を持っていたと、とりわけ、様々な文化、あるいは社会活動などの点で、この山背において聖徳太子の業績というものがこのような関係から導き出されて、今日にいたるまで伝えられたと、そういうふうには受け止めるべきであろうと思います。

やがて平安時代になって天台宗や真言宗というような新しい宗派が成立し、とりわけ京都に近い比叡山

を拠点とした天台宗、そして平安京の中に東寺という拠点寺院をもっていた真言宗は、いずれもこの聖徳太子の業績というものを十分に称賛する、そういう姿勢を取りましたから、聖徳太子ゆかりの様々な寺院といったものに、さらにまた大きな評価が与えられ今日まで語り継がれることになってきたというふうに考えられるわけであります。

今回は六角堂頂法寺、太秦の広隆寺という聖徳太子にゆかりの深い寺院を取り上げ、その創建のいきさつ等についてみてまいりました。

この両寺院ともに、京都にお住いの皆様方には大変なじみの深い親しまれた存在であると思います。

さらに深草の伏見稲荷大社も含めて、どういう意味をもってこういった寺院や神社が創建されるにいったったのか、そういった歴史的な興味、関心を抱いてあらためてこの両寺院、神社にお参りいただきますと、また意味深いものがあるかと存じます。

本日は長時間にわたりまして、ご視聴賜りありがとうございました。



ご覧頂き、
有難うございました。